

2023年田平小教区黙想会

「その子をここに、わたしの ところに連れて来なさい」

黙想会を始めたいと思います。今年は福音書のいろんな場面から「ここに」という言葉を頼りに学びを得たいと思います。皆さんの手もとに「瀬戸山の風」はあるでしょうか。もし良ければ、2023年1月号の中田神父の記事は、あらためて読み返しておいてください。

田平教会は、2023年の年間テーマを「ここに、イエスさまのところに連れていきましょう」としました。今回の黙想会は、この年間テーマを掘り下げるためのものです。「ここに連れて来る」とはつまり「イエスさまのところに連れて来る」わけですが、「だれを」イエスさまのところに連れて行くのか、「どのように」連れて行くのか。そうしたことも**今年の黙想会**を通して考えたいと思います。

■福音書全体で、「ここに」を機械的に検索すると43箇所見つかります。マタイ福音書が15箇所、マルコ福音書が8箇所、ルカ福音書が11箇所、ヨハネ福音書が9箇所です。

■意味を掘り下げる必要がないと思われる箇所（たとえばマタ 8:29 突然、彼らは叫んだ。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、我々を苦しめるのか。」など。）は除外し

ます。さらに福音書間で（特に共観福音書の間で）重複している物語などを整理すると、学びを得られそうな項目が12項目見つかりました。

■そこから組み合わせ、黙想のために6つの材料を提供します。

- ①【先生、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです】
- ②【神殿より、ヨナより、ソロモンよりまさるものがここにある】
- ③【パンと魚をここに持って来なさい】
- ④【その子をここに、わたしのところに連れて来なさい】
- ⑤【行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい】
- ⑥【ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる】
- ⑦【はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には】
- ⑧【主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう】
- ⑨【わたしが祈っている間、ここに座っていなさい】
- ⑩【あの方は復活なさせて、ここにはおられない】
- ⑪【ここに何か食べ物があるか】
- ⑫【あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい】

6つの黙想はそれぞれ、以下の通りです。

■イエスのそばにいることは素晴らしいこと。イエスはこの世の聖所、預言者、王にまさる。

■小さなささげ物がイエスのもとに集められ、奇跡

が起こる。いのちの危険にある子どもがイエスのもとに連れて来られ、奇跡が起こる

■イエスのもとに集められると、御父の御心を行う人になっていく

■「ここに一緒にいる」そのときあなたは本当の意味で生きる

■イエスが祈っている間、弟子はここに座って学びを得る

■復活したイエスが「ここに」と招いている

① イエスのそばにいることはすばらしいこと。イエスはこの世の聖所、預言者、王にまさる。

●「イエスのそばにいることはすばらしいこと。」十分に喜び味わっていなくても、イエスのそばにすることがすばらしいといくらかでも考える人でなければ、信仰生活を維持することも、信仰を子どもたち孫たち、出会った人に伝えることはできません。

●趣味やスポーツでも、喜びや楽しみが理解できていなければ、誰かを同じ趣味やスポーツに誘うことができないのと同じことです。「教えた人がその後辛い目に遭うかも知れない」そう思ったら積極的に教えたりしないはずです。

●神学生時代に、萩原神父様と鯛ノ浦小教区内の巡回教会を一緒にお手伝いして回った経験があります。とても楽しい時間でした。もちろん単純な楽しさではなく、苦労も味わう時間でしたが、この道を自分も歩もうと考えた原点だったと考えています。

何か、「ここに留まることはすばらしい」という体験がなければ、一つのことに長く留まることは難しいのです。

●この一回目の話では、「自分自身をここに連れて来ること」をテーマにしたいと思います。最初のテーマを考えるため、まずは福音書から「イエスの姿が変わる」物語、御変容の箇所を読みましょう。共観福音書すべてにこの出来事が採用されていますが、その中でルカ福音書を読みたいと思います。ルカ福音書第9章28節から36節です。

◆イエスの姿が変わる

9:28 この話をしてから八日ほどたったとき、イエスは、ペトロ、ヨハネ、およびヤコブを連れて、祈るために山に登られた。

9:29 祈っておられるうちに、イエスの顔の様子が変わり、服は真っ白に輝いた。

9:30 見ると、二人の人がイエスと語り合っていた。モーセとエリヤである。

9:31 二人は栄光に包まれて現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について話していた。

9:32 ペトロと仲間は、ひどく眠かったが、じっとこらえていると、栄光に輝くイエスと、そばに立っている二人の人が見えた。

9:33 その二人がイエスから離れようとしたとき、ペトロがイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」ペトロは、自分でも何を言っているのか、分からなかったのである。

9:34 ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。

9:35 すると、「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」と言う声が雲の中から聞こえた。

9:36 その声が出たとき、そこにはイエスだけがおられた。弟子たちは沈黙を守り、見たことを当時だれにも話さなかった。

●「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」9章33節、ペトロの言葉です。

●この世の光景とは思えないような場面に出くわして、それをずっととどめておきたい。ペトロはそうのように考えたでしょう。たとえそれが、未熟な理解から出てきた言葉であっても、あまりのすばらしさにどうにかして留め置きたいと思った気持ちは十分理解できます。

●私は、父親が2009年に亡くなったとき、父親の姿をビデオでいろいろ撮影しておけば良かったのになあと悔やむことがあります。父が輝いている様子を、この世の様子を動画でとどめておけばどんなに良かっただろう。今になって思うことがあります。

●私が持っているのは唯一、平戸口中央家畜市場で誇らしげに自分が育てた牛を語っている場面だけなのです。ペトロが御変容のイエスを仮小屋に残したかった気持ちを考えていたら、この世に父親が生きた証を残したかった自分自身と重なりました。

●今回久しぶりに、私の父が肺がんを患う前、最後の肉牛の品評会の様子を見返してみました。「三区若雌の二」という部門で九頭出品されて、一次審査に合格した牛が一つ前に出され、二次審査を経て最終審査に二頭出て、県の代表と補欠が決まるという

審査でした。父の出品した牛は最終審査に出ることができず、映像を撮影していた私の「ざんね～ん」という声が入っていました。

●この映像のおかげで、私の中では父の生きていたときの様子をもう一度蘇らせることができました。しかし、時間が前に進みません。どれだけ映像を見返しても、亡くなって13年経った今と繋がらないのです。父親の記録映像だけでは、父親の「今」に繋がってあげられない。あらためて理解しました。

●ペトロはどうでしょうか。ペトロも当時「今」にしがみつこうとしましたが、ペトロを助ける出来事がその先に待っていました。34節35節です。「ペトロがこう言っていると、雲が現れて彼らを覆った。彼らが雲の中に包まれていくので、弟子たちは恐れた。すると、『これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け』と言う声が雲の中から聞こえた。」

●「これはわたしの子、選ばれた者。これに聞け」。ペトロは、光り輝くイエスを見て、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と叫びましたが、イエスのそばにいて、留まり続けることで、もっとすばらしいことに出会ったのです。光り輝く姿は一時的でしたが、イエスは復活して、栄光に輝く姿となりました。そしてイエスを信じる者にも、復活の栄光にあずからせてくださるのです。

●私は、父親が品評会で輝いている姿こそ、これ以上ない姿だと思っていましたが、その先があったのです。牛飼いで輝いていた父は、全生涯を導いてくれたイエスのそばにいて、復活の希望に招かれている。かつて父親に輝きを与えてくださったイエスは、今も復活を信じてその日を待っている父に輝き

を与えておられるのです。あの時の父が、今も輝いている。この理解が得られたのは、イエスの照らしのもとで父のことを思い巡らしたおかげでした。違う別の場所にいたとしても、この理解は得られなかったことでしょう。

●「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」これは中田神父の思い込みでしょうか？中田神父が、黙想会の説教をするために、無理に造り上げた幻想でしょうか？その問いに答えるのは私ではありません。イエスご自身が、御自分のもとにいることはすばらしいことだと保証してくれます。

●中田神父がこの黙想のために積み上げたものはいつか消えてしまうものです。けれども、イエスご自身が保証してくれるものは、決して消えることはありません。私たちはイエスが保証してくれるものをこそ信頼すべきです。これから、イエスのことばに耳を傾けましょう。

●二つ取り上げます。一つは、弟子たちのお腹が空いて、安息日に麦の穂を摘んで食べたときのことで、これは、私たちが生きていてぶつかるすべての疑問に、イエスは誰よりも優れた答えを示してくれる。だから、御自分のもとにいることはすばらしいのだよという保証です。マタイ12章1節から8節を朗読しましょう。

◆安息日に麦の穂を摘む

12:1 そのころ、ある安息日にイエスは麦畑を通られた。弟子たちは空腹になったので、麦の穂を摘んで食べ始めた。

12:2 ファリサイ派の人々がこれを見て、イエスに、「御覧なさ

い。あなたの弟子たちは、安息日にしてはならないことをしている」と言った。

12:3 そこで、イエスは言われた。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。

12:4 神の家に入り、ただ祭司のほかには、自分も供の者たちも食べてはならない供えのパンを食べたではないか。

12:5 安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか。

12:6 言っておくが、神殿よりも偉大なものがここにある。

12:7 もし、『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』という言葉の意味を知っていれば、あなたたちは罪もない人たちをとがめなかったであろう。

12:8 人の子は安息日の主なのである。」

●「ファリサイ派の人々」とは、ユダヤ人の守るべき掟である律法（私たちが言う「六法」）を、どのように実行すれば律法にかなうのか、法律に反しないのか、そういうことを研究していたグループで、指導的立場にある人たちでした。

●彼らは律法をどのように守るべきか、最も理解しているという自負がありました。イエスの弟子たちが安息日に麦の穂を摘んで食べるのは、「安息日に労働をしてはいけない」という掟に完全に反していると考えたのです。

●イエスは、安息日の本来の姿を示して、神が望まれるように安息日を過ごすほうがよほど大切だと反論します。ファリサイ派の人の興味関心は、「安息日に何をしてはいけないか」ですが、イエスの関心は「安息日に何をなすべきか」だったのです。

●父なる神が安息日に求めているのも、「安息日に

何をなすべきか」でした。「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」がこのことをよく表しています。イエスのそばにいますと、本当に大切なことを知ることができます。これはすばらしいことです。

●二つ目は、当時指導的立場にあった律法学者とファリサイ派の人々から、「しるしを見せてください」と言われたときのことで、彼らがしるしを求めたのは、イエスを信じるふりをするためでした。

●そもそも彼らに信じようという気持ちはこれっぽっちもありませんでした。この箇所から学べることは、イエスのことばを信じる人、聞く耳のある人にはしるしはあとでついて来る。イエスは復活して、ことばをしるしで証明してくれる。だから、御自分のもとにいたることはすばらしいのだよという保証です。マタイ12章38節から42節を朗読しましょう。

◆人々はしるしを欲しがらる

12:38 すると、何人かの律法学者とファリサイ派の人々がイエスに、「先生、しるしを見せてください」と言った。

12:39 イエスはお答えになった。「よこしまで神に背いた時代の者たちはしるしを欲しがらるが、預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられない。

12:40 つまり、ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、大地の中にいることになる。

12:41 ニネベの人たちは裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。

12:42 また、南の国の女王は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。この女王はソロモンの知恵を聞くために、地の果てから来たからである。ここに、ソロモンにまさるものがある。」

●物語で登場するヨナは、ニネベの町が墮落して、危機に瀕していることを説教し、彼の説教に耳を傾けた王をはじめ、町の人すべてが生活を改めました。危機に瀕しているとき、耳を傾けるべき相手は神であることを悟り、滅びを免れます。

●これから、危機に瀕しているとき「ヨナにまさるもの」であるイエスに耳を傾けた人を一人紹介します。

●中田神父は大島造船所がある西海市の太田尾教会に赴任しているときにボートの免許を取りました。太田尾教会には巡回教会として間瀬教会がありましたが、間瀬教会に籍を置いていた信者で高尾さんという人がいました。「正直」が歩いているような人、「信仰」が歩いているような人でした。

●この高尾さんの手ほどきで、ボートでの釣りが始まったのですが、この方は大島造船所で働くためにやって来て、町営のアパートに住み、定年まで働いたのもともとの所属教会である長崎市外海町の出津教会と本来の自宅に戻りました。

●中田神父は太田尾教会時代から教区広報委員会で働いていたので、長崎のカトリックセンターに通うとき、必ず高尾さんの家のそばを通るのです。ある時電話で、「神父様、珍しい魚を食べに来ませんか？」と声がかかり、喜んでご馳走に与りました。

食べた魚はウツボでした。「海のギャング」と呼ばれる魚ですが、白身で脂がのって、大変おいしい魚です。高尾さんがボートから釣り上げたのでした。

●数ヶ月してまた電話がかかりました。今度は奥さんからでした。当然「お魚が手に入った。食べにおいで」の電話だと思ったのです。しかし奥さんの声は深刻なものでした。「お父さんが船から落ちて、行方不明になっている。」信じられませんでした。

●結局一週間経って、お父さんの遺体が長崎市の南、香焼に上がりました。奥さんから詳しいいきさつを聞き、「お祈りします」と言おうとしたら、「神父様、よかったら神父様が出津に来て、葬儀をあげてもらえませんか？」と仰るのです。私に務まるだろうかとも思いましたが、当時の主任司祭から了解を得て葬儀ミサを司式しました。

●悲しい別れとなった高尾さんのために、私は次のように説教したのです。「高尾さん、船に這い上がることができず、また陸地に泳ぎ着くこともできず、さぞ残念だったことでしょう。しかし『正直』が歩いているような人、『信仰』が歩いているような人だったあなたは、こう考えたかも知れません。『この世の命という綱と、復活の命という綱と、どちらか一方しかもはや掴めない。私は、復活の命の綱を掴む。』そしてあなたは、復活の命の綱を両手でしっかり掴んで旅立ったのだと思います。高尾さん、あなたが掴んだ命綱を、いつか私たちにも掴ませてください。」

●危機に瀕して、高尾さんは「ヨナにまさるもの」であるイエスに耳を傾けました。彼は今、天国で「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことで

す」と、イエスさまをほめたたえているはずです。
●たとえの後半部、南の国の女王はソロモンの知恵を聞きにはるばる訪ねてきました。ソロモンは神から知恵を授かっていたので、難問にも明快に答え、女王を驚嘆させます。一国の王が知りたがっている問いの答えを、神の知恵を授かったソロモンは示してくれます。

●私たちはこの世界で起こるすべてのことについて、神の知恵による照らしを必要としています。ここでは成長発展のヒントが、南の国の女王に与えられました。ようやくここまで辿り着いた私たちに、イエスのことばはなるほどと響きます。「ここに、ヨナにまさるものがある。」「ここに、ソロモンにまさるものがある。」

●この黙想会の第一の目的地が見えてきました。「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。」**まずは、お一人お一人が、この信仰を持つ必要があります。**今日は、黙想会という形でここにあります。しかたなく、ここにいるのでは「素晴らしいこと」どころか「不幸なこと」です。ぜひ、黙想が終わるまでには「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と言って帰れるようにしたいものです。

② 小さなささげ物がイエスのもとに集められ、奇跡が起こる。いのちの危険にある子どもがイエスのもとに連れて来られ、奇跡が起こる。

● 二回目の話では「弱い立場にある人をここに連れて来る」ということをテーマにしたいと思います。

「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。」そうは言っても、見栄を張ってカトリックの信仰を自負したのでは誰もついては来ないでしょう。親が子に対して、「私たちがカトリックの信仰にとどまっているのは、素晴らしいことです」と言う場合でも、子どもたちはその言葉だけでは話を聞いてくれないかも知れません。親子の間ですらそうであれば、他人に過ぎない人と人との間で、どうして話を聞いてくれるのでしょうか。

● そこでまず、奇跡を体験して「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と実感した例を福音書の中に見つけたいと思います。当時の奇跡を通して、現代の私たちも「わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです」と感じる事ができるのか？ そのことも考えてみましょう。

● マタイ14章13節から21節「五千人に食べものを与える」奇跡を読みましょう。関連する奇跡は、共観福音書のマタイ・マルコ（6章）・ルカ（9章）、ヨハネ（6章）にも登場します。あえて今回は、パンと魚について「ここに」という表現が含まれているマタイとヨハネを残し、さらに物語の中でイエスが「それをここに持って来なさい」と「ここに」を

強調している点を重視して、マタイ福音書を採用しました。朗読の際も、少しでも「ここに」を意識して朗読してみたいと思います。

◆五千人に食べ物を与える

14:13 イエスはこれを聞くと、舟に乗ってそこを去り、ひとり人里離れた所に退かれた。しかし、群衆はそのことを聞き、方々の町から歩いて後を追った。

14:14 イエスは舟から上がり、大勢の群衆を見て深く憐れみ、その中の病人をいやされた。

14:15 夕暮れになったので、弟子たちがイエスのそばに来て言った。「ここは人里離れた所で、もう時間もたちました。群衆を解散させてください。そうすれば、自分で村へ食べ物を買って行くでしょう。」

14:16 イエスは言われた。「行かせることはない。あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい。」

14:17 弟子たちは言った。「ここにはパン五つと魚二匹しかありません。」

14:18 イエスは、「それをここに持って来なさい」と言い、

14:19 群衆には草の上に座るようにお命じになった。そして、五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて弟子たちにお渡しになった。弟子たちはそのパンを群衆に与えた。

14:20 すべての人が食べて満腹した。そして、残ったパンの屑を集めると、十二の籠いっぱいになった。

14:21 食べた人は、女と子供を別にして、男が五千人ほどであった。

●「弟子たちは言った。『ここにはパン五つと魚二匹しかありません。』」（17節）四福音書の中で、

マタイとルカは、「パン五つと魚二匹しかありません」と言っています。マルコは「(パンは)五つあります。それに魚が二匹です」(マルコ6・38)と表現し、ヨハネは誰が持っているかにも目を留めて「ここに大麦のパン五つと魚二匹を持っている少年がいます。けれども、」(ヨハネ6・9)と記述しています。

●表現の違いにどれくらいの意味があるのかは分かりません。ただ、「パン五つと魚二匹しかありません」のほうが「絶望的な状況」をうまく切り取っていると思います。イエスがパンと魚を群衆に配りたいのに、弟子たちは「あなたのお望みに、わたしたちは協力するだけの持ち合わせがないのです」と、自分たちの貧しさ弱さをさらけ出しているのです。

●ところがこの「すべてさらけ出す」その先に、イエスは奇跡を用意しておられるのです。イエスは、「それをここに持って来なさい」(18節)と仰ってくださいました。自分たちの弱さ貧しさ、もしかしたらイエスの期待に応えられなかった敗北感も、すべて差し出す。そのとき、奇跡が起きたのです。イエスがおられる場所、「ここに」と表されたその場所は、「すべてをさらけ出しても恥ずかしくない場所」であり、「すべてを委ねるとき、奇跡が起きる場所」なのです。

●典礼の頂点である聖なる三日間、その「聖金曜日」の典礼に参加したことがあるでしょうか。この前日、聖木曜日のミサが終わると祭壇に乘せてある布をすべて取り外し、伝統的にはすべての御像に紫の布をかけます。これは、「主イエスが死んで葬られた」ということを表すためのものです。

●ですから聖金曜日当日は、世界中どこも、ミサが行われません。その代わり、受難の朗読と聖体拝領だけが行われます。この場合、聖体拝領に用いられる御聖体は、聖木曜日に二日分を用意して、それを用いています。

●さてこの聖金曜日の典礼で、司祭が入堂して最初に行うことがあります。それは祭壇の前で、床にひれ伏す行為です。「跪く」動作をする司式者もいますが、私はひれ伏しています。ひれ伏す動作は、ひれ伏す相手に、自分をすべて明け渡す行為です。「私はすべて、あなたのものです。あなたにすべてを委ねます。」そういう意味です。

●イエスも、御自分をすべて明け渡しました。そして三日目に復活なさいました。イエスの復活は「奇跡」ではありませんが、御自分を御父にすべて委ねた結果、驚くべき栄光がその先に待っていたのです。中田神父も、あのひれ伏す動作（一分もないと思いますが）を経て聖金曜日の典礼に入りますが、その意味するところは「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」ということです。その上で、祭壇に向かっていくのは、「それをここに持って来なさい」という意味です。

●ちっぽけな人間が、パンとぶどう酒を用いてイエス・キリストの御体と御血を日々の祭壇の上に現存させます。「主よ、あなたのお望みに、協力するだけの持ち合わせがないのです」と、自分たちの貧しさ弱さをさらけ出すことしかできないのに、イエスは「それをここに持って来なさい」と仰り、司祭一人一人を使って、毎日毎瞬間、祭壇の上で奇跡を起こしてくださるのです。

●「床にひれ伏す」動作でもう一つ思い出しました。司祭叙階式の場面です。叙階の秘跡を授ける部分で、大司教様が最も重要な部分を唱えているとき、秘跡を受ける受階者たちは床にひれ伏してその時を迎えます。三分くらい床に伏しているかと思いますが、この時「自分自身のすべて、思いも望みも、おささげします」そんな気持ちで待っていたと思います。

●こうして、人間に過ぎない者が、パンの奇跡を祭壇の上で繰り広げる者へと造り変えられます。司祭の働きは「イエス・キリストの身分で」おこなわれるわざで、司祭自身が超能力を身につけたわけではありません。司祭に叙階されて一ヶ月くらいは、本当に恐る恐る、ミサをささげていた記憶があります。

●儀式を間違えてはいけないという恐れもありますが、聖なるものを取り扱っていることへの恐れがありました。自分自身のことを「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」と理解しているので、祭壇の上の奇跡を見るたびに、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と感じるのです。

●話は少しそれますが、2022年11月27日、待降節第1主日から、「新しいミサの式次第」が用いられています。すでにご存知でしょう。もう慣れてきたところかも知れません。この新しいミサの式次第には、「今さら覚えるのは大変だ」という思いがどうしても頭から離れないでしょう。

●でも一つだけ言わせてください。司祭は、この「新しいミサの式次第」のおかげで、若手の司祭もご年配の司祭も、「恐る恐るミサをささげる体験」

ができています。「恐る恐る」とは、あの新司祭時代の新鮮な体験のことです。

●「新しいミサの式次第」のおかげで、一介の人間に過ぎない者が司祭に叙階され、パンの奇跡を恐る恐る執り行う、その体験をもう一度させてもらっているのです。日本語でミサをささげるすべての司祭がこの「恐る恐るミサをささげる体験」を通して、「パンの奇跡」を新鮮に感じ、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と感じる。日本語のミサが始まって50年が過ぎましたが、今回の「ミサの式次第」の改訂は、司祭たちが確実に「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と感じる体験でした。

●信徒の皆さんは、まだそこまでの実感は持っていないかも知れません。今回の「新しいミサの式次第」を新しく感じるのも、もう少しの期間です。どうかよろしくお付き合い願います。

●これだけパンの奇跡、ミサのことを持ち上げていながら、これから話すことを聞くと心配になるかも知れません。イエスから「あなたがたが彼らに食べる物を与えなさい」（16節）と言われた弟子たちは、「ここにはパン五つと魚二匹しかありません」と答えるしかありませんでした。

●実は長崎の教会には、「本当に」パン五つと魚二匹しかないのかも知れない。そう思うことがあるのです。皆さんが保育園児だったとき、同級生のカトリック信者はどれくらいいたのでしょうか？小学生だったときはどうでしょうか？きっと多かったと思います。ちなみにわたしが小学生時代、カトリック信

者の同級生が10人いました。

●それが2023年現在はどうなっていると思いますか？田平教会に目を向けると小学生六学年で16人、中学生三学年で7人です。本当に少なくなりました。この傾向は田平教会だけではなくて、平戸地区のほかの教会も同じような傾向です。

●嘘みたいな話ですが、私が司祭になった1992年から5年間お世話になった浦上教会には、教会学校に小学生が延べ400人くらい通ってきていました。一学年に40人のクラスが二クラスありました。小学生中学生の中で双子が覚えている限り三組いました。

●双子は見分けが付きません。私の受け持ちのクラスの子もでさえ見分けが付かず、日曜日のミサで双子のうち一人が聖体拝領に並び、しばらくしてもう一人が聖体拝領に来たのですが、私が勝手に思い違いをして「お前はさっき聖体拝領したじゃないか」と注意したら、「ちがいます」と言われてはっと気が付いた、そういう笑うに笑えない出来事もありました。その浦上教会でも、子どもたちは激減しているそうです。

●子どもを例に挙げましたが、信徒数の多い教会かどうかに関係なく、長崎の教会は、「本当に」パン五つと魚二匹しか持たない、そういう状況と言えるかも知れません。司祭になりたいと小神学院で養成を受けている学生は七人です。

●彼らが全員、大神学院に進むとは限りません。私たちが中学一年で入学したとき、同級生は十六人（途中で十七人になりましたが）、最終的に司祭になったのは四人でした。四分の一の確率です。七人で四分の一となると、かろうじて二人ということに

なります。

●パン五つと、魚二匹しか持たなかった弟子たちに、イエスは何と声をかけたのでしょうか。「それをここに持って来なさい」でした。パン五つと、魚二匹を差し出す場所は、他にも考えられます。当時の人々が市場でそれを差し出せば、ほかの物と交換してもらえたかも知れません。食料品と布生地を交換できるかも知れません。

●しかしイエスは、「それをここに持って来なさい」と言うのです。「本当に」パン五つと魚二匹しかない状況で、それをイエスに委ねる。ここから奇跡が始まります。田平教会はイエスによって引き起こしてもらった奇跡をたくさん経験している教会です。なぜなら出身司祭が22人いらっしゃるからです。修道者はもう数えるのも大変なくらいです。

●考えてみましょう。「本当に」パン五つと魚二匹しかない状況で、ほかの場所に委ねたとします。奇跡は起こるのでしょうか。「期待した結果」や、「期待以上の結果」は与えられるかも知れませんが、「奇跡」は起こらないかも知れません。しかしイエスのもとに委ねるなら、イエスは奇跡を起こすことのできる方です。あなたがわが子を通して「奇跡」を期待しているのであれば、委ねる価値はあると思います。

●「現代に奇跡は起こらない。あらゆる物が現代の学問で説明できる」そう考える人もきっといると思います。奇跡を、無知な人の迷信と切って捨てる人もいるかも知れない。しかし教会は、奇跡を今でも信じています。もう一つの物語を朗読してから、話

を続けることにしましょう。マタイ福音書第17章14節から20節、「悪霊に取りつかれた子をいやす」物語です。

◆悪霊に取りつかれた子をいやす

17:14 一同が群衆のところへ行くと、ある人がイエスに近寄り、ひざまずいて、

17:15 言った。「主よ、息子を憐れんでください。てんかんでひどく苦しんでいます。度々火の中や水の中に倒れるのです。

17:16 お弟子たちのところに連れて来ましたが、治すことができませんでした。」

17:17 イエスはお答えになった。「なんと信仰のない、よこしまな時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をここに、わたしのところに連れて来なさい。」

17:18 そして、イエスがお叱りになると、悪霊は出て行き、そのとき子供はいやされた。

17:19 弟子たちはひそかにイエスのところに来て、「なぜ、わたしたちは悪霊を追い出せなかったのでしょうか」と言った。

17:20 イエスは言われた。「信仰が薄いからだ。はっきり言っておく。もし、からし種一粒ほどの信仰があれば、この山に向かって、『ここから、あそこに移れ』と命じても、そのとおりになる。あなたがたにできないことは何もない。」

●これだけ医学・科学・その他の学問が進歩している時代にも、説明不可能な出来事が起こることを、私は何度も体験しています。ですから私は、「すべての現象を現代の学問で説明できる」と断言できないでいます。

●「病者の塗油」という秘跡があります。命の危険

にある人に、司教様によって祝福された油を塗って、苦しみに耐え、神の望みであれば健康の回復が与えられる秘跡です。30年の司祭生活で、少なくとも五人は、現代医学では説明の付かない危機的状況から回復しました。

●五人とも、家族が呼ばれ、これこれの状況であるから今週が山場であると告げられた人です。最後に司祭を呼ぶ必要があれば許可しますと言われて、例外的に通されて病者の塗油の秘跡を受けました。そのうちの一人は田平の人です。医学的には説明の付かない回復を見せて、今も生かされています。

●なぜこんな体験ができるのでしょうか。病院では命の危険にある人は集中治療室に置かれて、24時間態勢で見守ります。医師と看護師のそば近くに置かれているのです。しかし、奇跡は起こらず、医学的な見立ての通りになります。

●そんな中でも、ある人には奇跡が起こります。

「その子をここに、わたしのところに連れて来なさい。」(17節) イエスのお世話のもとに置かれたとき、人間的には期待の持てない中で奇跡が起こるのです。その姿を見るとき、何十回に一回かも知れませんが、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」と感じるのです。

●私の知る限り奇跡は、「人をイエスのもとに連れて行く」その時にしか体験できないのです。医学・科学・その他の学問に委ねても起きなかったことが、イエスにすべてを委ねるとき、目の前で体験するのです。

●ヨハネ・パウロ二世をご存知でしょう。2013年に聖人に列聖されました。列聖までの歩みは、2005年

の死去から6カ月後、フランス人の修道女のマリ・シモンピエールさんのパーキンソン病を治癒したことが一度目の奇跡と認められ、福者となりました。彼女は、奇跡が起こる前夜、ヨハネ・パウロ二世の名前を鉛筆で書いて祈っていたとのことですが、科学的な観点から治癒の因果関係は解明できなかったそうです。

●福者になった後、聖人になるにはさらにもうひとつ奇跡を起こさなければなりません。ヨハネ・パウロ二世は福者になってわずか6年後の2011年5月1日、コスタリカ出身の女性を病から救った（家族がヨハネ・パウロ二世のために祈るや脳の重大な損傷が治癒された）ことが認められました。このとき女性は、枕元に立ったヨハネ・パウロ二世の姿を見たそうです。苦しみを背負った人がイエスのそば近くに居るヨハネ・パウロ二世のところに連れて来られて、奇跡が起こったということでしょう。

●皆さんにとって病者の塗油を経て回復した田平の人は遠い教会の見知らぬ人でしょうか？私のように田平に何年かしか住んでいない者でも、身近な人です。身近にいる人がイエスのそばに置かれたとき、信じられないような奇跡を体験しました。

●イエスが「それをここに持って来なさい」「その子をここに、わたしのところに連れて来なさい」と言うのは現代人の私たちにとってまったく意味の無い呼びかけでしょうか？私はそうは思いません。二千年前に言われた「それをここに持って来なさい」「その子をここに、わたしのところに連れて来なさい」これらのことばは、今でも意味があり、価値があると考えます。

●私は、奇跡を見たのに「見ていない」と言うことができません。もし「奇跡なんて作り話だ」と言うなら、私は偽善者になってしまいますし、毎日が奇跡だった司祭としての30年も無駄だったことになります。

●私は見て、知ったことを皆さんに告げ知らせています。「それをここに持って来なさい」「その子をここに、わたしのところに連れて来なさい。」そうすれば、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」を体験できる。これが私が見てきたことのすべてです。

●弱い立場にある人、命の危険にある人。こうした人を「ここに連れて来る」「イエスのそば近くに連れて来る」家族だけでなく、周りの人もぜひお世話をお願いします。

③ イエスのもとに集められると、御父の御心を行う人になっていく。

●三回目は「私の力では導くことができないけれども、言い聞かせとか導きを必要としている人をここに連れて来る」というテーマにしたいと思います。

私は鯛ノ浦教会で育てられました。大神学院では老司教会と西新教会で実習を経験しましたが、それでも鯛ノ浦教会で育てられた、と思っています。

●福岡の実習先では「大神学生に任せられたこと」についての学びはありましたが、小教区の主任司祭が司祭として実際どのように生活しているのか、暮らしぶりを見ることはありませんでした。

●鯛ノ浦教会では、休暇中に司祭館でお手伝いをさせてもらうことで、土日だけでなく小教区主任司祭の平日も見せてもらうことができました。その最初の体験ができたのが熊谷神父様でした。

●熊谷神父様が鯛ノ浦教会にやって来たのは、私が高校生になった時期でした。同時に山脇神父様が助任神父様でした。山脇神父様にもたいへんお世話になったのですが、当時助任神父様は巡回の船隠教会に常駐していたので、本教会の鯛ノ浦教会に住んでいた熊谷神父様の影響は大きかったと思います。

●熊谷神父様と過ごした夏のお手伝いは今でも忘れません。ある日葬式が入りまして、私は侍者をするために呼ばれました。時間より早く来た私を熊谷神父様は司祭館に上げたのです。

●神父様はステテコ姿で考え事を巡らせていました。ステテコ姿は母方のじいちゃんが夏の定番の格好だったので特に驚きませんでした。が、「教会の神

父様がステテコ姿だった」そこに驚きました。今考えると、自分自身が夏に短パンで過ごしているのと何ら変わらないわけですが、ご自分のありのままの姿を見せたことが、とても印象深く刻まれました。

●熊谷神父様はほとんどの場合、ミサの説教を手書きで用意していました。ワープロをお使いにならなかったのも手書きだったのでしょうか、書くこと自体が立派だと思いました。

●そしてもう一つ立派だったのが、原稿を書く紙です。何に書き付けていたと思いますか？新聞のチラシを折って、ホチキスで閉じてノートにして使っていたのです。裏表8頁のノートを作って、それに流れるような文字で原稿を書き付けていました。

●この日も、葬儀のための説教を、広告チラシで作ったノートに書き付けていました。作家さんが、思いついたことを少しずつ書き綴るような、そんな雰囲気で、時に青のボールペン、時に赤のボールペンで、書いていました。

●ミサの説教をする神父様によっては、原稿を書かない神父様もいるでしょう。書かないことは本人のスタイルですから問題ではないですが、原稿を書かないとしばしばまとまらない説教になったり、まとめようとして長い説教になったりするわけです。

●その点、熊谷神父様は几帳面に広告チラシで作ったノートに原稿を書き付けていました。通算で何年鯛ノ浦におられたのか覚えていませんが、熊谷神父様は作った原稿を残しておられたので、病気で残念ながらお亡くなりになったあとにたくさんの原稿が出てきました。今の時代でしたら、その原稿から追悼説教集ができていたことでしょう。

●ありのままの姿と言えば、萩原神父様も貴重な先生でした。今はお告げのマリア修道会の本部修道院敷地内にお住まいです。私はこの黙想会が終わったら、必ず神父様を訪ねようと思っています。今訪ねずに先延ばしにして、会えないまま旅立ってしまったとなっては悔やんでも悔やみきれません。山内豊神父様もです。山内豊神父様については、病院を退院されたら必ず中田神父に連絡がほしいです。

●さて熊谷神父様、萩原神父様を思い出させる、聖書の箇所を朗読します。マタイ福音書第12章の「イエスの母、兄弟」という箇所です。

12:46 イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。

12:47 そこで、ある人がイエスに、「御覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます」と言った。

12:48 しかし、イエスはその人にお答えになった。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか。」

12:49 そして、弟子たちの方を指して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。」

12:50 だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」

●「だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。」(12・50) イエスの実の母は、マリアしかいませんから、これは時間と場所に縛られた関係です。また「兄弟」と呼ばれている人々は、当時は血縁関係にある人々は総じて「兄弟」と呼んだので、親戚の人たちでしょう。これもまた、時間と場所に縛られています。

●けれども、「わたしの天の父の御心を行う人」であれば、時間と場所に限られていた「イエスに近い人々」の中に加えてもらえるのです。たとえ、時間と場所が遙か遠く離れていても、です。

●先に話した熊谷神父様、これから話す萩原神父様、ともに「天の父の御心を行う人」でした。タイプは違っていました。ともにミサの説教のためにきっちり原稿を用意し、「御父の御心はどこにあるのか」を常に考え、考え続けていた神父様でした。

●萩原神父様は、私が大神学校に入学してから鯛ノ浦教会においでになりました。すでにワープロを十分に使える神父様でした。当時の中田神父のように貧乏学生ではなかった萩原神父様は、たぶんその時代でワープロと専用プリンターで100万円はすると思われる機材をお持ちでした。

●ただ、時代はワープロからパソコンに移行する時期でしたので、私は後輩で曾根教会の大神学生だった大水文隆君と結託して、NECの9801シリーズパソコンをお勧めしました。実は魂胆がありまして、私と大水神学生とで、この最新のパソコンを使わせてもらおうという腹づもりでした。この最新機器を、まるで萩原神父様も私も、同世代の大神学生であるかのような気さくな関係で学び合ったのでした。

●萩原神父様は鯛ノ浦教会に来て銀祝を迎えました。今考えると中田神父の田平教会での姿が重なります。夏の休暇中には、聖書講座、黙想会、説教の原稿、はたまた古い原稿など、萩原神父様の手書きの原稿をたくさん清書しました。ここで萩原神父様の思想を大いに学ばせてもらいました。

●そうした中で、萩原神父様はお昼寝をすることが

ありました。ローマでの留学時代もそうですが、西洋の人は結構昼寝をするわけです。昼の時間は店を閉めて休むという習慣の国もあります。

●そういう習慣からでしょうか、萩原神父様は1時間くらいお昼寝をするのが日課でした。私はその間黙々と原稿の清書をします。これがありのままの日常でした。もし萩原神父様から、「私が清書をするから、あなたは隣で昼寝をなささい」と言われても、とてもではないですが眠れないと思います。

●けれども萩原神父様は、ご自分のありのままの姿をさらけ出して、司祭の日常を垣間見させてくれたのです。私は一人の司祭のありのままの姿を見ても、「こんなものか」とは思いませんでした。

●むしろ、「すべてをさらけ出して、『わたしの天の父の御心を行う人』を生きているのだな」と妙に納得したのを覚えています。私たちは見えているところだけで「わたしの天の父の御心を行う人」になろうとしているではありません。人生のすべてを賭けて、生き方を写し取ろうとしているのです。

●萩原神父様のように昼寝をしても、熊谷神父様のようにステテコをはいていても、「わたしの天の父の御心を行う人」がここにいる、と感じさせる司祭。こんな司祭に、私もなりたい。そう思います。

●紹介した鯛ノ浦教会にやって来た二人の神父様は、イエスのもとに集められて、司祭に叙階され、導かれて「御父の御心を行う人」となりました。ありのままをさらけ出して、生涯「御父の御心を行う人」であるためのコツを教えてくださいました。

●そのそばに集まることで、不出来で未熟な中田輝次神学生も、そのありのままの生き方を通して「御

父の御心を行う」とはどういうことかを学びました。今度は、先輩主任司祭から教えていただいた「御父の御心を行う生き方」を次の世代の人に伝える必要があります。伝える段階に移って、ようやく私の学びは完成し、実を結びはじめるのです。

●そこで、また別の聖書の箇所を引用して、人は教えられたことをどのようにして新しい人々に伝えていけるのかを考えてみましょう。ヨハネ福音書第4章「イエスとサマリアの女」の物語、1節から26節までの、必要な部分を朗読して考えてみましょう。

4:3 [さて、イエスは]ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

4:4 しかし、サマリアを通らねばならなかった。

4:5 それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。

4:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

4:7 サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。

4:9 すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。

4:10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

4:11 女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。」

4:12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」

- 4:13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渴く。
- 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渴かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出る。」
- 4:15 女は言った。「主よ、渴くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」
- 4:16 イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、
- 4:17 女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。
- 4:18 あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」
- 4:19 女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。
- 4:20 わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」
- 4:21 イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。
- 4:22 あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。
- 4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。
- 4:24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」
- 4:25 女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」
- 4:26 イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

●このあと、サマリアの女（女性）は起こったことを村中の人々に伝えに行きます。水を汲みに井戸に来た彼女は結果的にイエスに呼ばれ集められて、自

分のことを言い当てた人がいると知らせに行ったのです。それは、「呼ばれ、集められて、御父の御心を行う使命を与えられた」のも同然なのです。

●私たちはミサや黙想会に参加しています。自分でミサに参加し、黙想会に参加しています。しかし、集まったこの聖堂を去るときには、使命を与えられて帰ります。たとえばミサの派遣の祝福です。

●昨年11月27日から「新しいミサの式次第」に沿ってミサがささげられていますが、その中には「感謝の祭儀を終わります。行きましょう、主の平和のうち」のほか、次のような派遣の言葉が用意されています。「感謝の祭儀を終わります。行きましょう、主の福音を告げ知らせるために。」これは立派な、「使命を与える言葉」です。

●ですが、ミサの最後に「行きましょう、主の福音を告げるために」と言われただけで「使命を与えられた」と感じる人は誰もいないでしょう。ミサのどこかで「使命を与えられた」と感じる部分があるから、派遣の言葉に意味が出てくるのだと思います。それはどこでしょう？もちろん「説教」です。

●説教で「使命」を受け取るのですが、皆さんふだんのミサで「使命を託された」と感じるのでしょうか。説教に問題があって、「使命」を託されたと感じていないなら、心の底から謝ります。

●しかし司祭の説教に「使命」が盛り込まれているとしたら、あとはそれをどう受け取ったか、皆さんの振り返りが必要になってきます。もしかしたら「自分に向けて言ったわけではないだろう」と高をくくって聞いておられるのかも知れない。

●あるいは、「そんな使命を託されても一般の信者

は忙しいのだからできない」と拒否しているのでしょうか。もう一度、説教に込められた「使命」を考える機会にしていただければと思います。

●これは余談ですが、信徒の皆さんは主任司祭を働かせるのが使命ですので、「神父様、今日の使命は何だったのでしょうか」と具体的に尋ねることもお勧めします。司祭自身にも刺激になるでしょう。

④「ここに一緒にいる。」そのときあなたは本当の意味で生きる。

●「レクリエーション」という言葉をご存知でしょうか。「趣味」とか「娯楽」そういった意味で理解している人も多いかも知れません。しかし元の言葉は「RE-CREATION」です。元の言葉の雰囲気大切に日本語にすると、「再び」「創造する」（この「創造」は「天地創造」の「創造」です）、つまり「自分らしさをもう一度取り戻す活動とか時間」のことを、「リクリエーション」「レクリエーション」と本来は呼ぶのです。

●その意味で、「私にとっての『RE-CREATION』の場はどこだろうか」と考えるのは役に立つと思います。「自分らしさをもう一度取り戻す活動とか時間」は、多くの人にとって必要なのです。

●余談ですが、この「レクリエーション」のことを詳しく教えてくださったのは大神学院の哲学科の時代に九州大学から教えに来ておられた稲垣良典先生でした。言葉の一つ一つをていねいに辿って、魅力的な授業をする先生でした。

●いつも、ハガキくらいの大きさのカード4枚を持ち込んで、これだけで90分の授業をこなしていました。中田神父の憧れの先生です。私も、カード4枚で一回の黙想をこなすのが理想のスタイルです。

●脱線してしまいましたが、「RE-CREATION」が生活にうまく組み込まれていれば、その人はいつも生き生きと過ごせます。「必要に迫られて」することがどんなに多くても、「RE-CREATION」がうまくできていれば、本当の意味で生きていると言えます。それほど、「RE-CREATION」はその人を活かす大切な要素なのです。

●イエスによって集められた12人の弟子たちから、「本当の意味で生きる」ことの大切さを考えてみましょう。弟子たちはどこで、「RE-CREATION」を手に入れていたのでしょうか。それを見るために、例としてマタイ福音書第16章「イエス、死と復活を予告する」を考えることにしましょう。

●朗読はしませんが、イエスが死と復活を予告するとペトロが「そんなことがあってはなりません」と言ってイエスに叱られまして、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と指示を受けます。イエスの生き方を背負うことが、本当に自分の命を救うことになる」と説きます。

●そしてイエスは次の言葉を仰います。

「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、人の子がその国と共に来るのを見るまでは、決して死なない者がいる。」(16・28)

これは復活の出来事を述べているのだと思いますが、「ここに一緒にいる人々」がもし12人の弟子だ

けだとしたら、私たちは無関係ということになります。しかしそうではないと私は思っています。

●つまりこういうことです。「ここに一緒にいる人々の中には、『本当の意味で生きる』者がいる」このように考えると、私たちにも恩恵が届くのではないのでしょうか。「ここに一緒にいる人々」とは、黙想会に参加している私たちであり、日曜日のミサに与る皆さんのことなのです。黙想会やミサは、私たちに「RE-CREATION」を与えてくれる。本当の意味で生きている人に造り変えてくれる。そんな場所なのではないのでしょうか。

●私は釣りが趣味なので気分転換には真っ先に釣りを浮かべます。しかし釣りでもどれだけ大物を釣っても、どれだけ数を釣り上げて、「心の渇き」を満たしてはくれませんね。満足とか達成感はありますが、どこまで到達しても「心の渇き」は満たされない気がします。

●ですから、私たちはどこかで「本当の意味で生きている」実感が必要なのです。私はそれを与えてくれるのはただ一人、イエス・キリストだと思っています。イエスが共にいてくれることを感じたとき（ミサや、黙想会など）、私たちは本当の意味で生きるのではないのでしょうか。

●もう一つ、聖書の箇所に触れて終わりたいと思います。イエスがラザロを生き返らせる場面です。この中でマルタとマリアがともに、「主よ、もしここにあなたがいてくださいましたら」と胸の内を明かしています。マルタとマリア、性格はまったく別ですが、同じ思いをイエスにぶつけるのです。

マルタはイエスに言った。「主よ、もしここにいて

くださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。(11・21)

マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。(11・32)

●イエスがここに一緒にいる。それが、マルタとマリアの姉妹にとって「人が生きることができる」根拠だったので。イエスがここに居てくれてさえいれば、兄ラザロは死ななかつたに違いないと、確信しているのです。

●マルタとマリアの理解は、直接的なものだったようです。間接的な意味合い、あるいは霊的な意味合いでの理解が深まる余地がありました。そこでイエスは、ラザロのよみがえりを通して、場所的には離れていても、イエスを信じる人と「ここにいる」ことができるお方であることを証明なさったのです。

●これは、まさしく私たちへのメッセージです。人が「再創造 (RE-CREATION)」を受けるためには、イエスと「ここに一緒にいる」という体験が必要なのです。私たちが、人として「本当の意味で生きる」ためには、イエスとここに一緒にいる体験がどうしても必要なのです。現代それはたとえば黙想会や、日曜日のミサによって与えられるわけです。

●「私の力では導くことができないけれども、言い聞かせとか導きを必要としている人をここに連れて来る」これによって、信徒の「使徒としての務め」を果たしてほしいと思います。

⑤ イエスが祈っている間、弟子はここに座って学びを得る。

●ここまで、「自分自身」「弱い立場の人」「言い聞かせ、導きが必要な人」をここに連れて来るというテーマを扱いました。最後は、「復活の主が、すべての人をここに連れてきなさいと招いている」この点をテーマにしたいと思います。

【中世の大学と神学部】ヨーロッパでは、伝統的に大学の「神学部」が最上位であり、他の学問はその次という位置づけでした。ですから最高の学びを修めた人とは、神学部を修了した聖職者たちでした。

●中村倫明大司教様の同級生に、牧山強美神父様と紙崎新一神父様がおられますが、今回も牧山強美神父様の思い出を話したいと思います。以前田平教会のミサ説教で、「井戸を深く掘れ」と教えてくださったという、あの神父様のことです。

●牧山神父様、中村倫明大司教様は、一緒に暮らした中で際立って優秀な先輩でした。これほど優秀だと、「神学校を辞める」ことなど考えもしないと思うかも知れませんが、どうもそうでは無かったようです。牧山先輩も一度は神学校を辞めることを考えたことがあったと聞きました。ただその思いとどまった理由が、際立って優秀だった所以かも知れません。

●牧山先輩はこう言って、小神学校を卒業し、大神学校に進んで行かれました。「神学校を辞めることを考えてみたけれども、辞める理由がどうしても見つからなかった。」すごいと思いませんか？

●たいていの神学生は、それが正当なものであれ不

当なものであれ、いくらでも辞める口実は見つかったものです。それなのに、牧山先輩は、「辞める理由がどうしても見つからなかった」と言うのです。

●「理由が見つからなかった」とはどういうことでしょうか。この黙想会の流れに沿って考えれば、「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。」を早くから理解し、イエスのもとに留まらない理由がどうしても見つからなかったから、神学校を辞めなかったということなのでしょう。

●もちろん違う説明の仕方もあるでしょう。けれども私は牧山神父様ではありませんから、本当はどのような思いで「辞める理由が見つからなかった」と仰ったのかは分かりません。分からないけれども、何か崇高なものがそこにはあったのだと思います。

●大学の神学部が最先端の学びの場という環境は現代の大学では無くなったかも知れませんが、最高の叡智が神学を学んでいる現実はいまだに続いています。昨年亡くなられた宮川神父様をご存知でしょうか。神父様は長崎教区きっての学者でした。

●長崎東高校の学生時代に洗礼を受けました。学校の勧めで東大を受験します。その当時は「一高」と言っていました。先生から「一高は試験が難しいから、しっかり勉強するように」と言われたのでその通り勉強して受験しました。

●見事に合格して先生に報告に行きます。先生が「試験はどうだったか？」と聞いたので宮川神学生は不満を漏らしたそうです。「先生が試験は難しいと言うから勉強していったけれども、一高の試験は易しかった。」こんなことを言える人が身近にいるのでしょうか？

●宮川学生は初めから司祭になることを考えていましたので、東大を恩師の時計を頂く優秀な成績で卒業した後、上智大学に進みます。同僚からは「最高学府を優秀な成績で卒業して、ほかに何を学ぶ必要があるのか？」と聞かれましたが、「ここで学ばなかったことを学ぶために上智に行く」と答えたそうです。

●その後も留学をしたり、教皇庁アカデミーの会員にも選ばれ、大学での講義、大神学校での講義、ライフワークだった安楽死の研究など、すばらしい業績を残して天国に旅立ちました。

●似たようなことは、松永司教様にも当てはまります。松永司教様は、今の南山高校当時の東陵高校時代、高校の先輩たちが行列して教えを請うていた生徒だったそうです。授業中はノートを取る必要も無く、話を聞くだけですべてが理解できていました。こうした人たちが社会で活躍する道を選ばずに聖職者になる、神学を学ぶということには、何かしらの理由があるはずです。

●それは「イエスのもとで学び続けることが、最高の学びを得ることになる」と証明してくれているのではないのでしょうか。その原点は、十二人の弟子たちです。イエスのもとに留まる弟子たちの様子が、マタイ26章で取り上げられています。少し朗読したいと思います。

◆ゲツセマネで祈る

26:36 それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。

26:37 ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始め

られた。

26:38 そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」

26:39 少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」

●ただしこの朗読で弟子たちは、イエスが苦しみもだえるほどの場面にさしかかっているにもかかわらず眠っていたことになっています。「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」(26・41)まさにイエスの言うとおりにになりました。

●ただ、イエスのもとを去る者はこの場面でも一人もいなかったのです。イスカリオテのユダが最終的にイエスのもとを去りましたが、イエスが十字架上で亡くなって復活したとき、十一人は復活したイエスを見て、イエスを信じたのです。

●弟子たちに、イエスのもとを去るきっかけが無かったわけではありません。ヨハネ福音書によるとイエスの考えについていけない者たちがイエスのもとを去り、十二人にも確認しています。そこで、イエスは十二人に、「あなたがたも離れて行きたいか」と言われました。

●それに対しペトロが答えます。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きましょうか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」(6・67-69)

●イエスのもとに弟子たちが留まることができたの

は、「イエスのもとに永遠に価値を失わない宝がある」と信じていたからです。これは、紹介した先輩神父様、司教様に通じる考えです。この地上では決して手に入れることのできない価値あるものを、イエスのもとで手に入れることができる。この一点で、優秀な人材がイエスのもとに、カトリック教会のもとにとどまったのです。

⑥復活したイエスが「ここに」招いている。

●ここからは私たちに当てはめていきましょう。私たちは日曜日ごとにこの教会聖堂に集まっています。それはかつての弟子たちのように、イエスのもとに留まっているのと同じです。

●本来はここに、イエスのもとに、永遠に価値を失わない宝があって、それを確実に見いだして成長し、養われていくはずですが、しかし現実はそのようではありません。多くのカトリック信者が日曜日に教会に来ていません。私たちも愚か者ではありませんから、出かける価値のない場所に出かけたりはしないのです。

●この物差しで考えるなら、多くのカトリック信者にとって、日曜日の教会は永遠に価値あるものを見いだす場所ではなくなったということになります。あるいは日曜日でなくても、たとえば誰かが亡くなれば教会に集まって亡くなった人を送り出しますが、そこにも出席するかしないかためらう人がいます。

●時間も都合も工面できて、その人とも面識がある。それでも亡くなった人とお別れをするための葬儀ミサに行かないとしたら、教会には魅力も価値も、本当に無くなったのかも知れません。

●そこでもう一度、「日曜日のミサ、イエスがささげる最後の晩餐に参加することは価値がある」「ここにいるのはすばらしいことだ」と言えるように、価値あるものをはっきりと見つけ出しましょう。永遠に価値を失わないものを見つけないことが、今年の田平教会年間目標を実行していく原動力になるはずです。

●中田神父はそれが、「よそでは手に入らないものでなければならぬ」と思っています。しかも、ここで体験しなければ得られないものでなければならぬと考えています。そのようなものを、私たちは教会に集まっている間に受け取っているのでしょうか。

●「雨が降っても槍が降っても」欠かさず教会に来る人は、そうした価値あるものがここにあると学んで確信しているのだと思います。イエスがおられるこの場所に留まることで、永遠に無くならない価値あるものを手に入れたので、欠かさずここに集まるのです。私たちはその人々に頭を下げて、教えを請うべきだと思います。

●中田神父があえて一つ、永遠になくならない価値あるものがここにあると指摘するなら、「復活したイエスのもとには、汲み尽くせない泉がある」こう表現したいと思います。そこで、イエスの復活の場面を聖書から拾い出して、味わうことにしましょう。その中で特に、「ここに」という表現に触れて

いる部分を取り上げて考えてみたいと思います。

●イエスの復活と関連して「ここに」という表現が現れる箇所が五箇所あります。それらを二つのグループに分けてとりあげます。復活のその日の場面で用いられているグループと、復活後弟子たちとイエスが出会ったときに使われているグループです。まず、第一グループ「復活のその日の場面」です。

●マタイ・マルコ・ルカの共観福音書で取り上げられた復活の場面で「ここに」が出てきます。三つとも同じ言い回しです。

【1】マタ 28:6 あの方は、**ここには**おられない。かねて言われていたとおり、復活なされたのだ。さあ、遺体の置いてあった場所を見なさい。

【1】マル 16:6 若者は言った。「驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なされて、**ここには**おられない。御覧なさい。お納めした場所である。

【1】ルカ 24:6 あの方は、**ここには**おられない。復活なされたのだ。まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出しなさい。

●「あの方は、ここにはおられない」「あの方は復活なされて、ここにはおられない」これはつまり、人間の活動で普通に出かけていく場所に、あの方はおられないということです。「あの方」とは、「先生、わたしたちがここにいるのはすばらしいことです」とペトロが叫んだ「あの方」です。

●ですから、復活なされたイエスに私たちは、復活

を告げ知らせている場所に行かなければ会うことができないのです。そこから出てくる答えは、「ここに、復活したイエスがおられて、私たちが招いておられる」ということです。

●昨年11月27日から、私たちは「新しいミサの式次第」に沿ってミサをささげています。あらためて、どのような場面で復活したイエスが私たちを「ここにおいで」と招いているのか確かめましょう。前もって中田神父が調べてみたのですが、分かりやすい形で出てくる箇所を九つ見つけました。一つずつ追って確認しましょう。

●開祭の儀「栄光の賛歌」の中で次の言葉を唱えます。「父の右に座しておられる主よ、いつくしみをわたしたちに。」復活し、天に昇って、全能の父の右に座しておられる主が、「ここに来て学びなさい。ここでRECREATIONを味わいなさい」と招いて、ミサ全体が始まります。

●聖書朗読、特に福音朗読は、復活して栄光に満ちておられる主イエス・キリストの御生涯についての朗読です。常にここでは復活したイエスが「ここに来て学びなさい。休ませてあげよう」と招いてくださいます。併せて言えば、「主は皆さんとともに」という招きにすでに、復活した主の招きがあります。

●そして説教のあとの「使徒信条」の中で、「三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます」と確認しています。

●パンとぶどう酒を取り扱う「奉献文」のまず最初にも、「主は皆さんとともに」と招きます。祭儀が

進んでいくごとに、私たちは復活した主の招きで導かれているわけです。

●感謝の賛歌では、「主の栄光は天地に満つ」とあります。これは、復活した主の栄光でしょう。主の栄光が天地に満ちあふれ、「わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです」とばかりに、「天には神にホザンナ」とほめたたえます。

●第二奉献文、第三奉献文、ともにパンとぶどう酒の聖別のあとに「信仰の神秘」「主よ、あなたの死を告げ知らせ、復活をほめたたえます。再び来られるときまで。」と唱えます。この信仰の神秘は社会のどこに出かけて探しても見つからない。「ここに」しか見つからないものですね。この神秘を体験し、間近に見た私たちは、主の死と復活を告げ知らせる使徒となるのです。

●司祭はこの信仰の神秘の直後に「聖なる父よ、わたしたちはいま、御子キリストの救いをもたらず受難、復活、昇天を記念し、その再臨を待ち望み、いのちに満ちたこの聖なるいけにえを感謝してささげます。」と唱えます。「この聖なるいけにえ」は御子キリストの受難、復活、昇天という神秘がすべて盛り込まれているものなのです。

●平和のあいさつ「主の平和がいつも皆さんとともに」それからミサの締めくくりの派遣の祝福「主は皆さんとともに」ここにも復活した主が「ここにしかないものをあなたは確かに味わってくれたね」という優しい言葉が込められている気がします。みことばと聖体に養われた私たちはその温かい励ましに強められて、社会生活に派遣され、キリストの福音を宣教するのです。

●九つ、拾ってみました。まだあるかも知れませんが、ざっと見ただけでも九つ、復活した主は私たちに「ここに来なさい。わたしのすべてをあなたに与えます」と招いてくださっています。これが、私たちが「ここに」集まる最大の理由です。

●復活の場面の「ここに」、その第二グループは復活後弟子たちに現れた部分からです。ルカ福音書とヨハネ福音書を見つけました。

【1】ルカ 24:41 彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここに何か食べ物があるか」と言われた。

【1】ヨハ 20:27 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

●復活の場面の「ここに」、その第二グループは、かつての「パンの奇跡」を思い出させます。パンの奇跡は、手もとにあるパンと魚は絶望的な量でしたが、ありのままをイエスに委ねたその先に奇跡が起こりました。

●ここでも、弟子たちがイエスの死に直面し希望を失っている中で、復活したイエスが「今からでもあなたたちがわたしにすべてを委ねるなら、希望のない中に希望を与えましょう」と招きます。

●ルカ福音書24章41節の「ここに何か食べ物があるか」は、「食べ物」によって復活したイエスを弟子

たちは想像したでしょう。これからの不安と恐れで疲れ切っている弟子たちは、復活したイエスが弟子たちの真ん中に来てくださったので、「復活したイエスに自分のすべてを委ねるなら、希望のないところに希望を与えてもらえる」と確信したのです。

●これは、たとえば田平教会聖堂のような、礼拝のために特別に用意された場所に集まらないと、なかなか味わえない体験です。この聖堂の雰囲気があってこそ、復活したイエスに力づけられる体験ができるというものです。

●弟子たちが家に集まっていたときと同じように、イエスを信じているけれども、毎日の生活で疲れている。そんな弱った状態の私たちに、復活のイエスは「ここに来なさい。わたしが元気づける食べものになってあげます。あなたも、あなたも、さあ食べなさい」と招いているのです。

●中には、「疲れている」だけではなく、「傷ついている」人もいるでしょう。ヨハネ20章27節、イエスがトマスに言われた言葉は、トマスの心の状態でもあったのです。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」

●十字架上で釘打たれた手。槍で突き刺されたわき腹。どちらも、最初の出現の場面でほかの弟子たちと一緒にその場に居合わせなかった後悔と悔しさの傷だったはずです。イエスは、傷つき病んでいたトマスがすべてを委ねて「わたしの主、わたしの神よ」(20・28)と答えたとき、「傷つき、打ちひしがれているすべての人に希望を与えた」のでした。

●最終的には復活したイエスが、私たち田平教会家族を「ここに」招いて、希望を与え、傷ついた人をいやしてくださいませ。

●もう少し言わせてください。私たち田平教会家族が体験していることは、私たちだけにとどめるべきではありません。「主よ、わたしたちがここにいるのは、素晴らしいことです。」そう確信したのなら、私の身近な人、導きを必要としている知り合いの人、最高の学びを求めている人を、一人でもいいから連れて来てください。

●私たちが理解したことを誰かに伝え、「ここに」連れて来たとき、わたしたちの黙想会は完成するのです。そして積極的に動き出して初めて、今年の年間テーマが前に進むのです。

●最後に、中田神父が田平教会の年間テーマにあと一ヶ月しか参加できないことをお許しください。理由は、今度の日曜日にお知らせします。イエスが語られた通りです。「そこで（は）『一人が種を蒔き、別の人刈り入れる』ということわざのとおりになる。あなたがたが自分では労苦しなかったものを刈り入れるために、わたしはあなたがたを遣わした。他の人々が労苦し、あなたがたはその労苦の実りにあずかっている。」

●黙想会の講話を辛抱強く聞いて下さり、感謝します。この田平教会家族の皆さん一人一人に感謝します。ありがとうございました。